

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 徐曉紅

施蛰存（しちつそん、1905-2003）は中華民国期にはジャーナリストとして、人民共和国期には上海・華東師範大学の古典中国文学教授として活躍したが、文学史においては心理分析小説の泰斗として知られている。彼は中学在学中に娯楽系の鴛鴦蝴蝶派（以下「鴛派」と略す）刊行物等に小説を発表、1922年の杭州・之江大学入学後は江南地方の同派文学結社の指導者となったが、26年に新文学派（社会派・芸術系文学）に転じては西洋心理分析的手法を用いた「周夫人」を発表、29年に上海・水沫社の中心人物として欧米文学の翻訳出版を行う一方、ハムスン、シュニッツラーらの「内的独白」の手法を駆使する作品群を創作した。

本論文は、施の初期文学活動を調査して新たに発見した小説数十篇を含む施の作品群を分析し、「現代派文学の始祖」と言われるハムスンらの欧州文学受容を併せ論じたものである。第一章は施が鴛派に抛りながら「新旧我無成見（新旧にこだわらず）」論を掲げて新文学派の文学観も受け入れていたことを、その投稿・サロン活動、同人誌経営などに関する新資料に基づきながら明らかにし、これまでの新旧を明瞭に区分けする文学史観が成立し得ないことを証明した。第二章は施の恋愛・婚姻を題材とする小説を分析、家出人の感傷的物語の系譜と作風変化の前兆を指摘し、施における鴛・新文学両派の要素の調和融合を明らかにした。第三章は水沫社に至る施の結社活動を社会史的視点から検討し、新文学派に転じたのちプロレタリア文学とモダニズムを中心とする30年代新興文学運動を展開するに至る過程を論じた。第四章は民国文壇におけるハムスン受容史を整理し、施における創作と翻訳との同時進行的相互影響関係を指摘し、施が未亡人の「生の叫び」を描く「周夫人」を執筆する等、欧州文学との同時代性を獲得していく過程を分析した。第五章は施文学全体に通底する人間の内面心理への注目は、彼の鴛派活動および外国文学への共鳴より生まれた点を考察した。

人民共和国では新文学派が正統とされて鴛派は批判され、更に施自身が28年以前の鴛派活動を詳しく語らなかつたため、実証的な初期施蛰存研究はほとんど存在しなかつたが、本論文は1920年代の新聞・雑誌を詳細に調査して多くの新資料を発掘し鴛派系社会的活動を初めて明らかにした。更に作品分析により恋愛・婚姻・貧困等の主要テーマと心理描写は30年代の施文学に通じることを実証した。西洋文学翻訳出版活動によるハムスン等の受容と欧州文学との同時代性獲得に関する考察も優れている。中国と外国、鴛派と新文学派との境界の自由な越境こそが施の特色である点を解明した点は特筆に値する。

本論文は施作品の分析と欧米文学との比較研究が不十分であり、施の30年代文学を詳細に論じていない等なおも課題を残すものの、顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。